

『麗気記』の世界観

三 橋 正

はじめに

『麗気記』全十八巻の各巻が別々に成立し、鎌倉末までに統合されたということは、概ね認められている。しかし、各巻の内容や相互の関連性、統合化の意味などについては明らかになっていない。

筆者はかつて『麗気記』の巻序構成を分析し、「神体図」四巻を除く本文十四巻についても、前半六巻と後半八巻は質を異にし、前半は伊勢神道との関連の中で形成され、後半は仏教的色彩をさらに強めていることを指摘した^①。そして後半の諸巻のうち、「心柱麗気記」と「神梵語麗気記」

は、密教儀礼を神道的に改変したことによって成立したものであった^②。このような成立基盤を異にする諸巻は、伊勢神宮を神聖視する立場からまとめられていると見て大過ないが、さらに各巻が如何なる関連性を持っているか、「神体図」など『麗気記』特有の図像が各巻の言説と如何に対応しているか、総体として如何なる意味を持っているかを考察しなければならない。

一、『麗気記』の構成

改めて『麗気記』全十八巻の構成を見てみたい。

『麗気記』の諸本を検討すると、巻序構成のないA系本、

中世の古註釈と共通する巻序構成を取るB系本、近世の版本と共通する巻序構成をとるC系本とに分類することができ、B系本とC系本との共通点を抽出することで、各巻の役割を見出すことが可能となる。

【表1】巻序構成対照表「B系本・C系本」

B系本の構成（順序）		C系本の構成（順序）	
①二所大神宮麗氣記	①天地麗氣記	①二所大神宮麗氣記	①天地麗氣記
②神天上地下次第	②二所大神宮麗氣記	②二所大神宮麗氣記	②二所大神宮麗氣記
③降臨次第麗氣記	③天照皇大神宮鎮座次第	③天照皇大神宮鎮座次第	③天照皇大神宮鎮座次第
④天地麗氣記	④豊受皇大神鎮座次第	④豊受皇大神鎮座次第	④豊受皇大神鎮座次第
⑤天照皇大神宮鎮座次第	⑤神天上地下次第	⑤神天上地下次第	⑤神天上地下次第
⑥豊受皇大神鎮座次第	⑥降臨次第麗氣記	⑥降臨次第麗氣記	⑥降臨次第麗氣記
⑦心柱麗氣記	⑦神梵語麗氣記	⑦神梵語麗氣記	⑦神梵語麗氣記
⑧神梵語麗氣記	⑧万鏡本縁神靈瑞器記	⑧万鏡本縁神靈瑞器記	⑧万鏡本縁神靈瑞器記
⑨万鏡本縁神靈瑞器記	⑨心柱麗氣記	⑨心柱麗氣記	⑨心柱麗氣記
⑩神号麗氣記	⑩神号麗氣記	⑩神号麗氣記	⑩神号麗氣記
⑪神形注麗氣記	⑪三界表麗氣記	⑪三界表麗氣記	⑪三界表麗氣記
⑫三界表麗氣記	⑫神形注麗氣記	⑫神形注麗氣記	⑫神形注麗氣記
⑬現図麗氣記	⑬現図麗氣記	⑬現図麗氣記	⑬現図麗氣記
⑭仏法神道麗氣記	⑭仏法神道麗氣記	⑭仏法神道麗氣記	⑭仏法神道麗氣記
⑮）⑬神体図	⑮）⑬神体図	⑮）⑬神体図	⑮）⑬神体図

本文のうち、前半六巻と後半八巻の相違は先に指摘したが、後半の中でも、⑩「神号麗氣記」と⑭「仏法神道麗氣記」の位置は共通し、それぞれの前に比較的分量の少ない三つの巻が置かれていることが明らかになる。

この構成から抽出された諸相について、さらに内容面から検討を加えていきたい。

二、「麗氣記」と灌頂儀礼（⑦⑧⑨の成立）

⑦「心柱麗氣記」（⑨）の中核は、独鈷杵の図と、その前後に掲げられた偈文と真言にあつたと考えられる。その独鈷杵は、大梵天王の身体であり、かつ伊勢神宮の心御柱として、師匠から弟子（行者）へ授けられるものであつた。

⑧「神梵語麗氣記」（⑦）の中核は、伊勢神宮の内宮・外宮に胎藏・金剛界の大日如来などを示す真言（梵語）を対応させた部分にあり、これによつて行者に伝えられる真言（梵語）は内外両宮に他ならないと認識され、「神梵語」へと変革したと考えられる。

つまり、両巻の根幹には灌頂儀礼でなされる金剛杵授与の儀礼があり、前者ではそれを伊勢神宮の心御柱と見なすため、後者では梵語（真言）を伊勢内外両宮の祭神として見なすため、その儀礼を権威付けるための言説が集成され、

ここから密教儀礼を基盤とした神道論が形成されたのである。その密教儀礼は、儀軌を忠実に再現するようなものではなく、かなり簡潔化・省略化された形で神道的に改変されており、それが行なわれた場としては大寺院ではなく、修験道の行場のような所が想定できる。

この両巻と一体化した形で存在する⑨「万鏡本縁神靈瑞器記」(⑨)は、伊勢内外両宮の御神体としての鏡を「大梵天宮天体靈光」として位置付け、さらに三種の神器などの密教的な解説を展開させている。

ここに、密教儀礼の中で伝授される独鈷杵と真言(神梵語)を伊勢神宮の象徴として捉え、さらに伊勢神宮などの御神体(神宝)をも取り込もうとする、『麗氣記』の基本姿勢が読み取れる。

三、修験者の手控えの集成(⑩⑭の成立)

⑦⑧が密教儀礼を神道的に応用した形で成立したとすれば、⑨は御神体(神宝)の一覧に密教僧が手を入れて成立したと考えられる。その意味で、伊勢神宮の社殿・祭神一覧ないしは神統譜・皇代記を基に成立した前半の諸巻(②③④⑤⑥)と似た性格を持ち、行者が伊勢神宮を観想するための手控えから発展したと見ることができ。

手控えという性格は、それぞれ独立して存在するようにも見える⑩「神号麗氣記」と⑭「仏法神道麗氣記」に、より顕著に表われている。

⑩「神号麗氣記」は、「神大性」として「太元祖神」から「二十八軍」まで四三項目と、「大日本国地靈神」として「葛木乙峯一言主神」から「熊野権現」まで六項目の簡単な解説から成る。前半では神仏に関する基本的な用語が取り上げられているのに対し、後半では葛城・金剛・熊野という修験道の霊山しか記されていない。ここからも『麗氣記』の成立に修験道が深く関わっていたことが読み取れる。

⑭「仏法神道麗氣記」は、冒頭に「以前条々以_二降化縁起_一明_三和光利物本誓_二、次於_一仏語甚深_三顯_二己心神祇_一、とあるように、それまでの見方とは逆に、仏教の用語から神祇を解説している。その内容を見ると、法相宗・三論宗・天台宗の簡単な解説に続き、「惣持教」すなわち真言宗を空海『即身成仏義』所載の偈文中心に詳説し、最後に密教による神仏一致の意義を説いている。最後の部分を除けば、まさに宗派を超えて山岳に集まる修験者に必要な「諸宗派の解説」であったと思われる。

四、「切紙」と圖像（⑪⑫⑬の成立）

本文中、残りの三巻は、上記の諸巻と全く様相を異にし、非常に短い文章と圖像とから成り立っている。これは一種の「切紙」の集成と見ることができ、『麗氣記』の成立を解明する鍵であると考えられる。前半冒頭にある①「二所大神宮麗氣記」②も「切紙」の集成という要素を持っているが、この三巻では図を伴うことで密教儀礼として秘密の伝授を行なうという体裁を維持していたと考えられる。

【表2】『麗氣記』本文中の圖像一覧

- ② 神天上地下次第↓内宮の形文Ⅱ社殿（A）
- ③ 降臨次第麗氣記↓外宮の形文Ⅱ社殿（E）
- ⑦ 心柱麗氣記 ↓ 独鈷杵Ⅱ心御柱（C）
- ⑪ 神形注麗氣記 ↓ 内宮を象徴する神鏡（D）
 - ・ 外宮を象徴する神鏡（E）
- ⑫ 三界表麗氣記 ↓ 外宮を象徴する神鏡（F）
 - ・ 内宮を象徴する神鏡（G）
 - ・ 両宮を象徴する神鏡（H）
- ⑬ 現図麗氣記 ↓ 半月Ⅱ八坂瓊の勾玉Ⅱ月輪Ⅱ外宮（I）
 - ・ 三鈷杵Ⅱ胎藏界諸尊Ⅱ八咫鏡Ⅱ内宮（J）

『麗氣記』本文中に示された圖像は全部で十あり、それをB系本の順に一覧すると【表2】のようになる。⑪⑫⑬の三巻には七つの圖像が集中しており、他の諸巻と比べて際だっていることは明らかである。しかもその圖像も、他書には見られない特異なものである。

⑪「神形注麗氣記」⑫には二つの円鏡が描かれているが、文章と対比すると「神体」についての圖像が無く、これは⑮「神体図一」に移行されたと考えられる。円鏡には独鈷杵や火炎宝珠をアレンジした独特な図様が描かれているが、第一の鏡（D）は胎藏曼荼羅の中台八葉院、第二の鏡（E）は金剛界曼荼羅の五智如来を表わしており、それぞれが内宮・外宮の御神体として描かれたことがわかる。

⑫「三界表麗氣記」⑪は、「宝山記」「大梵天王常恒說法」「天札抄」という三つの短い文と三つの円鏡の図によって構成されている。最初の二つの圖像（F・G）は、両界の種字曼荼羅に対応させることで伊勢両宮を表象しているが、⑪「神形注麗氣記」⑫と逆で、外宮・内宮の順になっている。そして第三の圖像（H）には梵字の𑖀（ア）と𑖂（パン）が書かれており、両宮を象徴する鏡として描かれたことがわかる。

⑬「現図麗氣記」には、半月（下弦の三日月）の中に龍を描いた図（I）と三鈷杵の図（J）が描かれ、それぞれを

「八坂瓊勾玉」で外宮、「八咫鏡」で内宮にあてはめるとする一文が付されている。但し、図の前にある本文はそれらと対応せず、「三種神財」の解説となっている。その解説は、「神体図」の図様（多くの写本では散逸した図様も含む）に対応していると考えられる。

⑪「神形注麗氣記」⑫「三界表麗氣記」⑬「現図麗氣記」の三巻は、特に「神体図」と深い関係があったことが明らかにする。ところが、ある図は「神体図」に移行され、ある図はこの三巻の中に残ったのである。換言すれば、「切紙」と一体化した形で創出された各図像が、『麗氣記』という総体が形成されるまでの間に、図像の振り分け（編纂）がなされたのである。その意味を探るために、先ずこの三巻にある図像を本文中の他の図像との関係から分析し、次いで「神体図」が形成されたことの意味について考察したい。

五、『麗氣記』本文中の図

改めて本文中の十の図像を検討し、それぞれの持つ意味を考察してみたい。

②「神天上地下次第」(5)と③「降臨次第麗氣記」(6)にある形文の図(A・B)は、伊勢内外両宮の神殿を象徴

するものである。⁽⁷⁾前半六巻のうち①「二所大神宮麗氣記」を除く五巻の基本は、神統譜・皇代記、伊勢の内宮・外宮の社殿一覧である。これら前半の諸巻が伊勢神宮を観想するために用いられたとするならば、神統譜・皇代記によりながら時間上における伊勢神宮の位置を確定し、⁽⁸⁾社殿構成を一覧によりながら地理的・場所的な構成をイメージしたものと想像される。②③は共に「降臨次第麗氣記」と呼ばれることもあり、④「天地麗氣記」とは別系統の神統譜・皇代記が用いられ、②では神代から第十一代垂仁天皇までの系譜に内宮の歴史を、③では垂仁天皇から第二十二代雄略天皇までの系譜と豊受大神に従った三十二の眷属神を掲げて外宮の歴史をまとめている。ということは、それぞれの巻の最後に付された「形文」(A・B)は、縦の時間間に定置された伊勢の内宮・外宮そのものを指していることになる。「形文」という伊勢神宮の建物を象徴する図を用いて、時間間上における内宮・外宮についての観想を確定させる意味があったと考えられる。

⑦「心柱麗氣記」(9)の独鈷杵図(C)は、本来密教の灌頂儀礼の場で師匠から弟子へ授与されるものであるが、この巻では、大梵天王の身体であり、伊勢神宮の心御柱であるとして授与されることが強調されている。心御柱は「忌柱」ともいわれる神聖な柱で、高床式の神殿の床下に

あり、建築上は意味をなさない。伊勢神宮内でも神秘とされ、もちろん一般に目にすることはできない。それを行者にとつては身近な独鈷杵からイメージさせるのである。

そして、⑪⑫⑬に見られる『麗気記』独特な図様へと発展する。その中核をなす円鏡図(D・E・F・G・H)は、両界の種字曼荼羅を伊勢両宮の御神体に見立てたものであり、密教による神仏一致の究極の姿といえる。

すなわち『麗気記』本文中の図像は、伊勢神宮の建築そのものを象徴する「形文」から、構造上必要ない神聖なものに配置されていることが理解される。『麗気記』を「僧侶(修験者)が伊勢神宮の観想するための書」という仮説に従って読むならば、先ず伊勢神宮を時空間上に位置付けながら「形文」により神殿をイメージし、密教儀礼で付与される独鈷杵が「心御柱」であると確信し、さらに曼荼羅的な図様から神そのものを体現させる、という徐々に神秘の世界へと至る段階があったことになる。そうだとすれば、⑪⑫⑬の諸巻に示された『麗気記』独自の図像は、僧侶(修験者)の伊勢神宮の観想により最終的に到達したイメージであり、それが簡単な解説と共に「切紙」として伝授されていたと理解される。

『麗気記』本文全体の構成をB系本に従って読み解くなら

らば、①で神秘なる世界への入り口が開かれ、②③④で時間的(神統譜・皇統譜による)・空間的(神殿・神体一覽による)に伊勢神宮が観相され、⑦⑧で密教的な独鈷杵授与による心御柱と印契・真言の獲得をし、⑨での準備段階を経て、⑪⑫⑬で両宮の御神体を感じ得るといふもので、まさに伊勢神宮の神体そのものを密教によって自らと一体化させる儀礼の書として構成されていたことになる。

六、『麗気記』の統合と「神体図」

②③の「形文」(A・B)が現実の建物の一部を抽象化したもので、⑦の独鈷杵図(C)が密教法具であるのに対し、⑪と⑫の円鏡図(D・E・F・G・H)は誰も到達し得なかった「イメージとしての伊勢神宮(の神体)」であった。それは限られた弟子にしか伝授できず、いつしか一般的な灌頂儀礼でもなされる独鈷杵授与の儀(⑦)以上に重要な意義を持ち、終にはこれらの巻の伝授こそ『麗気記』の核心と見なされるようになったと考えられる。

特に「天札巻」と呼ばれる⑫「三界表麗気記」には両宮を一鏡に統合させる図(H)があり、『麗気記』内で最極秘の巻と位置付けられた。⑦「心柱麗気記」についての注釈でも、『麗気聞書』に「此ノ巻ニオイテハ天札ノ後ニ伝

授スト云々」とあり、国会図書館本や神宮文庫本・乙（守
晨本）に「此卷惣天札後伝授」などとあるように、中世後
期には⑫「三界表麗氣記」の後に⑦「心柱麗氣記」が伝授
されていた。但し、その段階で「心柱麗氣記」が伝授され
たとしても、それは卷（言説）の伝授であり、独鈷杵の伝
授が行なわれていたとは考え難い⁹。それは独鈷杵の図が描
かれていたことから窺える。密教僧による独自の「イ
メージとしての伊勢神宮（の神体）」は、『麗氣記』前半（②
〜⑥）でなされた伊勢神宮の時間的・空間的位置付け、次
の三卷（⑦〜⑨）でなされた心御柱や御神体の感得の後で
はじめて到達し得たと考えられるが、それらが一連のもの
として『麗氣記』という形でまとめられると、そこに至る
までの過程は忘れ去られ、究極の姿を伝授することにしか
意義を認めなくなり、その結果、⑫「三界表麗氣記」を中
心とする『麗氣記』の読み直しがなされたのであろう。⑦
「心柱麗氣記」と⑧「神梵語麗氣記」では密教のありきた
りの儀礼を置き換え（読み換え）たにすぎなかったが、後
の諸巻では独自のイメージを伝授する段階にまで進展し、
それに基づく再構成が可能になった。すなわち、密教儀礼
の神道的読み換え（置き換え）から、神道独自の儀礼の創
造へ展開したといえる。

ところが円鏡だけに注目しても、⑪「神形注麗氣記」で

は内宮（D）・外宮（E）という順であるのに対し、⑫「三
界表麗氣記」では外宮（F）・内宮（G）の順で、さらに両
宮を象徴する図（H）がある。これは、『麗氣記』という
総体が形成される以前の段階で、様々な伊勢神宮の神体が
イメージされていたことを意味する。つまり各巻は、一回
ごとの観想の到達点として得られた図様を記録したものに
過ぎなかったと考えられる。

本来は一回ごとの観想の結果として得られたイメージが、
記録され、集成されると、他のものとの対比に曝されるこ
とになる。その中で、ある図像は「切紙」との一体による
伝授が維持され、ある図像は「神体図」へ移行させられる
ことになったと考えられる。

四巻にわたる「神体図」は、⑪「神形注麗氣記」⑫「三
界表麗氣記」⑬「現図麗氣記」の三巻で追求された「イ
メージとしての伊勢神宮（の神体）」をふまえ、さらに、よ
り体系的な神道世界を（おそらく曼荼羅を構成すべく）再構成
しようとしたことにより成立したと想像される。

例えば、「神体図一」には⑪「神形注麗氣記」から移行
された天人や馬鳴の図像があるが、それを金剛界成身会の
諸尊にあてはめた際に生じた不足を補う形で作成されたの
が「神体図四」にある九尊形であったと考えられる。また、
伊勢内外両宮の神体を、円鏡図（D・E）だけでなく、宝

珠や神形、さらには三昧耶形をアレンジした円鏡図で示すなど、神秘世界を顕現化させる様々な努力の跡が混在している。しかし、巻物の形態でしか存在しないことを考え合わせると、曼荼羅を構成する部材を集めたものの、全体を組み立てる段階に至らなかった。すなわち、未完に終わったと考えられる。

おわりに

『麗気記』の図像については、前半の諸巻にも「神体図」と対応する文章があること、また、諸本や『麗気記』注釈書によって「神体図」の図像・構成が異なっており、儀礼を伴う伝授によって変化した可能性があることなどが、既に指摘されている。さらに、図像と対応する本文が、解説として書かれたのか、あるいはイメージが文章化された後に図像が描かれたのかなど、本文との詳しい対応関係についても検討を加え、その上で『麗気記』の世界観を追求する必要がある。密教儀礼により日本の神を観想するということは、ある意味で密教が日本的な展開をとげた究極の姿である。それが、どのように形成され、どのように展開するのか、さらなる解明に向けた努力がなされなければならない。

注

- (1) 拙論「中世前期における神道論の形成―神道文献の構成と言説―」（大隅和雄編『文化史の諸相』（吉川弘文館、二〇〇三年）所収）、拙論『麗気記』の構成と言説」（『日本学研究』四号、二〇〇一年）。
- (2) 拙稿「密教儀礼から神道論へ」（『東洋の思想と宗教』二二号、二〇〇五年）。また、赤塚祐道「密教による『麗気記』の相承―麗気灌頂の成立と変遷―」（本誌掲載）も参照。

- (3) 森本仙介「『麗気記』の諸本」（大正大学総合佛教研究所神仏習合研究会編『後注詳説麗気記Ⅰ』（法蔵館、二〇〇一年）所収解説）参照。

- (4) 前掲注(2)参照。

- (5) 『麗気記』と内容が近似する『天地麗気府録』でも、
(6) 『麗気記』の図像については、門屋温「神体図」との関連について（前掲注(3)書所収解説）で、『麗気問書』『麗気記私抄』『麗気制作抄』に見える「神体図」の構成が区々であることから「切紙形式の伝授形態を当然想定させる」という指摘がなされている。なお、『麗気記』の図像は諸本により異動があるが、ここでは先行研究に従い、

『弘法大師全集』本によった。

- (7) 「形文」は『麗気記』以外の両部神道書に散見し、また、実際の伊勢神宮の建築と一致しない。門屋温「伊勢「御形文」考―両宮形文深釈をめぐって―」（菅原信海編『神仏習合思想の展開』（汲古書院、一九九六年）所収）参照。

- (8) 空海が自ら齋らした祖師像を『御請来目録』では曼荼羅の直後に置いているように、密教では祖師像が時間的（歴史的）密教継承と共に超時間的にも聖なるものと俗なるものとを継ぐ重要な仏具として不可欠の役割を果たした。頼富本宏『密教―悟りとほとけへの道―』（講談社現代新書、一九八八年）など参照。

- (9) 『神宮方并神仏一致抄』における「麗気灌頂」を見ても、『麗気記』を安置して伝授することはなされたようであるが、「心柱麗気記」の巻を伝授する時に独鈷杵を付与する、という巻ごとの儀礼が存在していたとは考えられない。赤塚祐道前掲注(2)論文参照。

- (10) 門屋温『麗気記』の凶像学―中世神道のイメージとシンボル―（本誌第三三号、二〇〇一年）。